

再起如何の問題の一面に労働運動者及研究家の問題とする處は日本に於て正攻法の罷工の效果如何てふ至大の疑點の愈々深められし感あることなり神戸の惨敗は鈴木文治氏に依る時、賀川豊彦氏に依る時、そは労働組合の力足らずして敗れしに外ならずとせらるるも、今次の神戸争議は罷工資金に於て(勿論罷業惠與金に及び得ざりしも)團結力に於て、人數に於て、信念に於て過去の日本の労働運動史上に見るを得ず又將來にも見易からざる條件を完備したるに不拘彼の如き惨敗を招けるに、是をしも力の不足とせば何時の日か力の充實を期し得べきかと云ふにあり 此論者の云ふところに従へば大會社に對するの對抗は事を一舉に決するにありとするが如し。賀川説か此説か、論の當否は究むべくもあらず。たゞ問題は掛つて取締官憲の眞は自由にして公正なるか否かにあり。乃ち勞資戰は不祥事に非ずして通常事なりとさるる時に於ては二説の當否が問題たるの價值を失ふべし。神戸の争議に臨みたる研究者及労働運動者は復曰く「神戸の労働者は第三者なるものが眞實に第三者に非ず、事實上會社側に支配さるる人々なることを眞に知るの機會を得たり。」と。神戸労働争議は研究さるべき多くのものを有し其運動の將來に就ても亦然り。神戸の労働運動界は今回の争議を機會として面目を改むべく回を追つて之れが記録と研究とを具備せしむことに努めむとす。

大正十年九月

労働調査會

第十一回労働調査報告 (神戸労働争議顛末第一報)

大正十年六月廿五日、神戸市和田崎三丁目三菱内燃機製造株式会社職工に依て揚げられたる労働争議の烽火は、瞬時にして川崎造船所、臺灣製糖神戸工場、神戸製鋼所、ダンロップ護謨工場を初め各工場に傳播し、全神戸市を擧げて争議の渦中に置き、天下の耳目を鐘むるに到れり。而して繫争四句川崎及三菱争議團が最終宣言を發表し惨敗其業に就くや其紹介、批評論壇を賑はしつゝあるもの、是れ神戸労働争議が我國に比類なき大争議たる條件を具備して間然するところなかりし故なるべし。而して本争議には一個の特色あり。我國労働運動進化史上より見るとき其大争議たる各條件以外に其特色こそ研究者の興味を中心たるを否むべからず。特色とは賀川氏に依て唱導せられたる、非革命主義と無抵抗主義の色彩をめぐる労働者の心理的離合なり。

一、神戸聯合會の發達

抑も關西に於ける友愛會は、大正二年末鈴木商店經營神戸製鋼所職工により友愛會本部直屬の葺合